

2025年2月2日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教25「真実の言葉」

詩編89：31～38、ヨハネ5：19～24

「子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである」（19～20節）ここでは父と子の一体性、同一性が強調されています。これはヨハネ福音書が初めから言っていることです。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」（1：18）「この方」イエスさまが神さまを示された。ですからイエスさまを通して、わたしたちは神さまを知る、神さまと出会うのです。イエスさまは「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（14：6）と言われました。さらに「わたしを見た者は、父を見たのだ」（14：9）とも言われます。子であるイエスさまを通して父である神さまと出会う。それ以外に神さまに出会う道はありません。

先ほど引用した福音書の冒頭の言葉に「いまだかつて神を見た者はいない」（1：18）とありました。そこに人間の罪の状態があります。アダムとエバが約束を破り、樂園を追放されて以来、人間は神さまを見ることも、神さまのところへ行くこともできなくなっていました。神さまとの接点を完全に失っていたのです。だから神さまを見ることができない。けれどもイエスさまがその接点になってくださる。イエスさまがおられるからこそ、わたしたちは赦されて神さまと出会う、神さまのところに行けるのです。

『ハイデルベルク信仰問答』では、イエスさまのことを「仲保者」と言います。神さまとわたしたちの間を取持ち、繋いでくれる存在のことです。神さまは、イエスさまを仲保者としてお遣わしくされました。わたしたちと同じまことの人間としてわたしたちの罪の償いの義務を負ってくださり、かつまことの神さまとしてその裁きの重荷に耐え、新しい義と命とを与えてくださる。そのことを信じて受け入れる時に、わたしたちは神さまの救いに与ることが出来ます。それが二度目のアーメン「はっきり言うておく」と言われたところに記されています。「はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている」（24節）

「永遠の命」とは、この地上の命が永遠に続くことではありません。罪を赦されて、神さまと共に生きることができる命のことです。神さまのもとを離れていた時、わたしたちは死んでいました。けれどもイエスさまによって罪を赦されて、死から命へ、永遠の命へと移される。この転換、移行をイエスさまがしてくださいました。それが十字架とよみがえりです。わたしたちを死から命へ移すために、イエスさまは十字架で死んで三日目によみがえってくださいました。死から命への道をつけてくださったのです。

そして、この救いを信じ受け入れることが他でもない洗礼です。洗礼は、イエスさまとの結びつきを意味しますが、イエスさまに結ばれて、わたしたちも死から命へ移される。イエスさまの十字架とよみがえり辿るようにして、わたしたちも死から命へ、永遠の命、神さまの子どもとして新しい命を生き始めるのです。パウロは書簡で「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キ

リストを着ているからです」(ガラテヤ3：26～27)と言います。この父と子の関係は神さまとイエスさまの関係だけではありません。洗礼を受けてイエスさまに結ばれることで、わたしたちも神さまの子とされ、父と子の関係を生きることができる。だから神さまに向かって「父よ」と呼ぶのです。祈りも礼拝も、すべてわたしたちが罪を赦されて、神さまの子どもとさせていただいているからこそ可能なのです。

ジェームス・ステュアートというスコットランドの牧師は、著書『受肉者イエス』(椿憲一郎訳)の中で、神さまが父であることがどのような恵みをもたらすのか書いています。そこでは、父と子という親子の関係に入れられることで人間は自然になると言います。それは形式ではなく、自然な親子の関係ということです。甘えや馴れ馴れしさではない。飾らない親と子の自然な関係です。親が子を無条件で愛し、許す。また子は親を信頼して素直に、単純に求めることができます。「あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるに違いない」(マタイ7：11) そのように神さまを信頼する関係性が生じるのです。

今日のところで「父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示される」(20節)とありました。神さまの御心が子に表されるということです。これも自然なことです。「子は親の鏡」という言葉もありますが、子が親に似てくることがあります。強要されるわけでもなく、自然と身についていく。そのようにして親が子に示す。特にわたしたちは信仰の継承を願いますが、これも押し付けであってはいけない。強要すればするほど、その反発も大きいでしょう。そうではなくて、一緒にいれば、繋がってさえいけば浸透していくのです。だからいつか信仰が染み出してくる瞬間が必ずあります。わたしたちはそのことを信じて待つのです。それが親の務めです。

先日とても嬉しいことがありました。毎月保育園に行つて先生たちと学びをします。先週もいつものようにお話をして帰ろうとしたら、ある職員の方が子どもたちの描いた絵を持って来て、机の上に並べたのです。その絵はその日の学びでわたしが紹介したある絵本の絵でした。『ジオジオのかんむり』という絵本です。ジオジオという名前のライオンの王様の話です。もう65年も前の絵本で、わたしも幼い時から親しんだ絵本の一つです。優しい心を育むキリスト教保育にふさわしい内容と思い、その日の学びで紹介しました。すると偶然にもその職員の方は最近子どもたちの心が少しギスギスしていたのでその絵本を読み聞かせた。それでジオジオの絵を子どもたちに描いてもらったというのです。キリスト教保育が浸透してきています。これまで学びを続けて来てよかったと思いました。「父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示される」信じて続けていければ必ず実りがある。そのようにして神さまの御心が表されていく。わたしたちも神の子とされて、その御心を示す器として用いられています。

天の父よ。罪の中にあつたわたしたちを死から命へと移すために、あなたはイエスさまをくださいました。その十字架とよみがえりの御業に合わせられ、わたしたちも死から命へ、永遠の神さまと共に歩む人生へと導かれています。すでに洗礼を受けて神の子とされたわたしたちは、あなたの御心を映し出す者とされています。どうか、その命を通して、あなたの御心を現していくことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。